



Title	中國思想史に関する研究：思想史へのアプローチ
Author(s)	莫, 寒
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16971号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16971
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99815
Type	doctoral thesis
File Information	Han_Mo_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 莫 寒

学位論文題名

中國思想史に關する研究——思想史へのアプローチ——

・本論文の観点と方法

出土資料が増え続ける中で、我々は前世代の學者よりもはるかに多く、かつ信頼性の高い資料を手にすることができ、學界も信古と疑古のバランスが取れた段階を迎えつつある。ここにおいて、本論文ではその研究方法を「求真・述學・客觀・思辨」と概括する。「求真」とは、單に眞實を追求するだけではなく、「偽なる者」の中に潜む眞實（その成立背景や思想的意義）をも見極めようとするのである。「述學」とは、胡適や清代の先學たちの傳統的な研究方法を繼承し、考證・校勘・訓詁などの方法を利用して原始文獻を處理し、思想發展の脈絡を復元する営みである。「客觀」とは、絶對的な客觀性を求めるわけではなく、古代の學者とは異なり、現代の研究者は古代思想を考察し評價するにあたり、可能な限り多くの先行研究を參照し、多元的な視點から思考を深めようとするのである。「思辨」とは、西洋哲學の長所を取り入れて中國思想を檢討する方法であるが、西洋哲學の獨特な形成脈絡と背景は中國思想とは全く異なるので、兩者を安易に同一視したり、淺薄な比較に終始したりすべきではない。本研究では「思想的論爭」に着目し、ある思想が激しい論爭を経て如何に定着するのかという過程を敘述し、具體的な問題をめぐる爭點から諸學者の思想的基盤を解明することにより、中國學術における思想的「爭鳴」の實態を歸納的に考察し、中國思想史に關する方法論を模索・檢證することを目指す。

・本論文の内容

序章では、本研究の意義、對象と方法、構成を述べる。

第一章では、「北辰」における定義に着目して、その解釋を整理した。まず、司馬談・司馬遷の『史記』天官書及び『史記』三家注から「天極星」の定義を、次に、李淳風の『晉書』『隋書』天文志から「北極」「北斗七星」の定義を、確認した。天文家の説と儒教の解釋と比較して、相違點をまとめた上で、邢昺『論語正義』の説明が不十分な所を指摘し、さらに、辰星・大辰・彗星と北辰との關係を明らかにした。最後に、朱子の説を通じて、三つの問題點（一）天之樞と渾天説、（二）北辰と北斗、（三）北極と極星についてまとめ、北辰の解釋史においては天文家の解釋と儒教の解釋とが徐々に混ざり合った實態を示し、儒教における北辰の認識は如何に變遷したかについて敘述する。それによって、中國思想史上において異なる領域の學者が同一の問題をどのように認識し、研究方法を如何に對比させるかを考察した。

第二章では、道家が重視する「無爲而無不爲」に着目して、その内包を再検討しつつ、『老子』と『莊子』知北遊篇の成立における「無爲而無不爲」思想の變容過程を敘述した。まず、『老子』諸本の首尾呼應から考察して、編集上の問題點・相違點を整理して、異文・衍字が発生した経緯とその背後の編集意圖とを明らかにした。次に、『莊子』知北遊篇の文脈をふまえて、「無爲而無不爲」を、「爲も無く不爲も無し」（爲という概念がない）と讀み解く可能性を論證した。さらに、『老子』三十八章の「無爲而無不爲」は、テキストによっては「無爲而無以爲」にも作るものもあるが、二句は元來、同じ意味合いであったと推論した。最後に、『老子』と『莊子』知北遊篇の成立における「無爲而無不爲」を檢討し、「無爲而無不爲」がどのように、最初の「爲も無く不爲も無し」という消極的な思想から「爲す無くして爲さざる無し」という積極的な思想に解釋されるに至ったかについて明らかにした。

第三章では、『易』文言傳の解釋を手がかりとして、先秦期における儒家と道家との善不善觀・禍

福観を考察することによって、文言傳の成立を再検討した。先秦儒家の「善」について、性善説の「至善」は禍福を豫知できるが「福報」が必ずあることを保証できない、また「不善なれば必ず禍報有る（不善必有禍報）」ことも言わない。一方、『老子』における「善」は自然に順應し、法則（規律）に順應する「善」であり、このような「善」を積むことを唱えて「積徳」とする。『韓非子』解老・喻老および『黄帝四經』雌雄節等の道家文獻では、「積徳」を解釋する際に、とりわけ「積不徳」が招く惡果を戒める。この點が文言傳と一致する。そこで、出土資料と先行研究を踏まえ、文言傳における坤卦初六の爻辭の解釋は、爻辭の「順」の意に基づいて、『老子』「積徳」思想を吸収し、解老・喻老・雌雄節等の解釋を参照して、整理・修正した後に儒家的「積善」の言い方に置き換えたのだらうと論證した。また、文言傳の成立は漢初文帝・景帝期、黄老思想が盛行した時期に位置づけるべきであることを述べた。

第四章では、朱子の『周易本義』について考察を行った。まず、『周易本義』と『朱子語類』の成立時期の關係を検討し、その後、朱子による六十四卦の起源に關する問題について、『朱子語類』における互いに矛盾する學説を比較し、それらを整理・提示した上で、最後に『周易本義』と照合した。それによれば、『周易本義』に示された學説は、すでに朱子晩年の成熟した結論であると考えられる。さらに、朱子による「元亨利貞」の解釋も考察した所、文言傳における「四徳説」を手掛かりとし、『程氏易傳』など先行の議論と照らし合わせながら、朱子の考證過程を復元した。

第五章では、『論語』の曾子「三省」の解釋について、曾子の教えをはじめ、「三」の解釋をめぐり、日本の學者はどのように朱注を受容・批判するのか、その實態を示した。まず、朱注に對する批判——伊藤仁齋と荻生徂徠の說を確認した。それに對して、懷徳堂の五井蘭洲・中井竹山は、朱子學の立場からであるが、從來の朱子學の解釋に従わず、自ら朱子の眞義を探究し、荻生徂徠の批判に反論していたことを明らかにした。さらに、後來の學者は各々の立場から、獨特点意見を述べていたことを敘述した。諸說を検證・整理しながら、江戸時代中後期における學術論争の實態を示し、日本における『論語』解釋史の思想的「争鳴」の一面を明らかにした。

結論として、五つの思想的「争鳴」の争点（問題点）、具體的には、①「北辰」における天文家と儒家の認識と論争、②道家の「無爲而無不爲」における先秦から漢初まで思想の變遷、③坤卦初六の爻辭における文言傳の解釋と思想の成立、④『周易』の六十四卦の起源と四徳説に關する朱子の考察、⑤儒家「三省」に關する朱子の解釋および日本での受容などをめぐって、中國學術における思想的「争鳴」の實態を歸納的に考察するにあたり、「求真・述學・客觀・思辨」と概括した研究方法および方法論を試みて、中國思想史に關する一定の檢證の有効性を得られたと考える。